

佐土原を訪ねて

— 歴史を訪ねる旅 (11) —



下土橋 渡

江藤淳氏（一九三二—一九九九年、日本の文学評論家）は、著書『南洲残影』でいわく、西南戦争における官軍と薩軍の対決は、決して開明派と土着派の対決などという、単純な図式で割り切れるものではあり得なかった。西洋をよく知りながら西郷の軍に投じた者もいたのであると。

村田新八がそうであり、『飢肥西郷』と呼ばれ親しまれた宮崎県日南市出身の小倉処平（しょうへい）がそうでした。そして、佐土原藩主の三男として生れながら、二十一歳という若さで鹿児島城山に散った島津啓次郎がいました。ちょ

うど十年前の平成二十年（二〇〇八年）の八月に島津啓次郎ゆかりの場所を訪ねたのが佐土原への初めての旅でした。

佐土原は宮崎市内中心部から国道一〇号を一〇数キロメートル北上した位置にあります。以前は宮崎県宮崎郡佐土原町でしたが、二〇〇六年に宮崎市に編入されました。

一、佐土原藩

佐土原は大友氏に属する伊東氏の拠点地でしたが、天正六年（一五七八年）に島津義久・義弘・歳久・家久の四兄弟に攻められ、島津家久が地頭職になります。天正十五年（一五八七年）の秀吉の九州征伐によって、島津一門が秀吉の軍門に降った後も、家久の子・豊久が領地を安堵されます（石高二万八千六百石）。しかし、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の合戦で島津勢は敗退し、伯父義弘の敵中強行突破を支援すべくその殿を務めた豊久

が戦死してしまうと、領地佐土原は徳川家康に没収されました

その後、義弘の子・忠恒と家康との間に和睦が成立。家康は薩摩・大隅・日向諸県郡の所領を安堵し、忠恒を島津家十八代当主（初代薩摩藩主、島津家久）として承認し、慶長八年（一六〇三年）に征夷大將軍となり江戸幕府を開きます。

この年に、家康は没収していた佐土原を島津氏に返還しますが、返還先は豊久系の家ではなくて、垂水島津家でした。大隅国垂水の第二代城主であった島津以久ゆきひさが移封され、以後佐土原藩は明治までの二七〇年間、十一代にわたって続きました。

幕末は、薩摩藩と行動をとみにし、十一代忠寛は、明治二年（一八六九年）に戊辰戦争の激戦の功により、賞禄三万石を与えられました。

なお、藩主家が薩摩藩の陪臣垂水島津家の分家であるため、薩摩藩（島津宗家）からは従属の立場にあると見なされ、支藩的な扱いとなっていました。幕府側からは独立した藩として見られていました。

二、佐土原人形

今から四〇〇余年前の慶長の役（一五九七年）の後、朝鮮から佐土原に移り住んだ高麗の人たちが戯れに人形を作り始めます。それが佐土原人形の起りときられています。明治初期から大正時代には、窯元が十四軒もあって人形作りが盛んだったそうです。現在は、残された型を基に、町内二軒の製作所で製作が続けられています。

佐土原藩は京都の伏見に藩邸を持っていたから、伏見の文化も早くに入ってきたと思われ。古い人形は京都伏見人形の流れを汲むといわれ、節句物、縁起物、風俗物など



佐土原島津藩主の屋敷兼政庁跡に立つ佐土原歴史資料館・鶴松館



佐土原人形（義経千本桜・静御前と狐忠信、佐土原人形製作所・ますや）



佐土原人形（饅頭喰い、佐土原人形製作所・ますや）



佐土原銘菓・鯨ようかん（お菓子処・やよい堂）

が作られました。明治時代からは佐土原独特の歌舞伎組人形が多くつくられるようになりました。鰻頭喰い人形に見られるように、四等身と素朴さ、温かい彩りの調和が佐土原人形の特徴だといわれます。

佐土原の代表的な人形である『鰻頭喰い』は、「お父さんとお母さんどっちが好き？」と問いかけられた幼童が、手にした鰻頭を二つに割って「この鰻頭はどちらがおいしい？」と問い返したという逸話を持つ人形です。

『鰻頭喰い』は伏見で作られたのが最初といわれ、伏見稲荷の土産として各地へ運ばれるうちに、全国のあちこちで作られるようになったそうです。伏見などの『鰻頭喰い』が男の子なのに対して、佐土原では途中から女の子の『鰻頭喰い』が作られるようになりました。明治期から続く佐土原人形店『ますや』の三代目坂本兵三郎氏が、大正の初めに、人

形は女の子が持つから女の子にした方がいいとの思いから、女の子にしたのだそうです。それ以来、佐土原では女の子の『鰻頭喰い』が作られてきました。

三、鯨ようかん

佐土原の有名な銘菓に『鯨ようかん』があります。米の粉を練って作った餅をあんこで挟んで蒸した和菓子です。日持ちがしないため、現地でしか食べることができず、『幻のお菓子』とも言われるとか。他の場所では、宮崎空港一階売店で当日朝に作ったもの（数量限定）、東京にある『新宿みやざき館KONN E』で冷凍されたものが入手できるそうです。

佐土原藩四代藩主島津忠高が二十六歳で早世。その子・万吉丸は二歳にも満たない年齢であったため、世継ぎを巡って争いが生じました。その混乱の中、万吉丸の母・松寿院が「息子と藩が、大海を泳ぐ鯨のように力強

くたくましく育つて欲しい」と願いを込めて鯨に似せた羊羹ようかんを作らせたのが始まりと言われます。万吉丸は後に第六代藩主島津惟久となり、名君と慕われました。

佐土原町内には鯨ようかんを売る店が数軒あるそうですが、入ったのは、広瀬中学校下の国道一〇号沿いにあるお菓子処『やよい堂』さんでした。一折（九個入り）を購入して、店内のテーブルを借りて写真を撮らせて欲しいと奥様をお願いすると、実は『丸に十の字紋』を入れた当店オリジナルの重箱があるのでですよと言つて見せて下さるので、それを借り、詰め直してもらつて写真を撮りました。良い写真が撮れた上に、嬉しいことに重箱をサービスしてもらいました。そして、家に帰ったら、鯨ようかんの美味しさもさることながら、頂いた重箱に喜んだ連れ合いです。また行く機会があつたら重箱がもう一個

欲しいと言います。今度は、ちゃんと重箱入りで買うことになります。

四、島津啓次郎

島津啓次郎は、第十一代佐土原藩主・島津忠寛の三男として、安政三年（一八五六年）佐土原に生れます。三歳で寺社奉行町田宗七郎の養子となり、十歳のとき、鹿児島に留学。藩儒学者のもとで儒学学修し、このときに西郷隆盛の『敬天愛人』の至誠道にも触れたといわれます。さらに翌年には、東京に移り、勝海舟門下生となります。啓次郎を初めて見たとき、その風貌と気迫に、『坂本龍馬の再来か』と驚いたという勝海舟は、啓次郎の眼を世界へ向けるべくアメリカ留学を勧めます。

明治三年（一八七〇年）、薩摩藩費留学生として十二歳の若さで渡米。アナポリス、ニューハーベン、グリンブルドなどで英語、フランス語、文学、数学等を学び、アナポリス

ではアナポリス海軍兵学校に籍を置きました。留学中の明治六年（一八七八年）、留学資格の都合上の理由で町田家との養子縁組を解消、島津家に復籍。

滞米生活七カ年を経て、明治九年（一八七六年）四月に帰国。当時設立準備中だった学習院のポストが準備され、意見を聴くべく招聘を受けますが、その設立意図が、華族の子弟のみを教育するという旧態依然としたものであることに反発し、辞退します。

望郷の思いを抑えきれず、師匠の勝海舟に書いてもらった西郷隆盛あての紹介状を懐に佐土原へ帰郷。帰郷後すぐさま、廃仏毀釈により廃寺となっていた寺を利用して私塾を開き、集まった同志と一緒に生活しながら、学習会を始めます。アメリカで学んだ自由民主の思想や知識を伝えようとするものでした。

三ヶ月後には、周囲の奔走により私学校へ



島津啓次郎
(1856~1877年)

と発展。帰国後構想を温め、準備を進めてきた学校『きよう文賢（きようぶんこう）』を立ち上げます。しかし、学校を立ち上げたばかりの明治十年（一八七七年）二月五日、鹿児島島の私学校徒が西郷隆盛を擁して決起。

有司専制（藩閥のエリートが独断的に政治を行うこと）の政府を倒すのだ！ 家族の反対を押し切り、『吾人の為さんと欲する所を為すのみ』として、啓次郎は立ち上げたばかりの学校を休校にして、西郷隆盛のもとに駆け

つけます。

しかし、西郷は啓次郎の参戦を拒否します。理由は、啓次郎が若く有為な人材だったこと、主家の島津氏の一族だったことなどによるとされています。しかし、啓次郎は佐土原の同志二〇〇余人とともに押しかけて参軍。啓次郎率いる『佐土原隊』は、熊本各地を転戦しますが、薩軍側は次第に劣勢となり、薩軍の田原坂の戦いでの大敗北により、啓次郎は佐土原隊と共に佐土原に撤収。その後、単身上京し、つてを頼って隆盛の助命や事態の打開に務めました。が、うまくいかずに郷里、やむなく再度薩軍に合流、可愛岳、三田井、椎葉、米良、小林を転々とし、同年九月二十四日、城山にて戦死。享年二十一でした。

『小説島津啓次郎』（二〇〇三年一月、鉾

脈社発行）の著者・榎本朗喬氏は、『佐土原藩史稿』の著者で元佐土原教育会会長、郷土史

家の桑原節次氏の次の言葉を、取り返しのない人材の喪失と、国家の危急存亡を憂う氏の名言としたいとし、その著書に引用しています。

— 彼をして寿を全うせしめれば、其の経綸によって国家に裨益する所、蓋し尠少でなかつたであらう —

（元九州職業能力開発大学校教授）

【用語】

経綸 〓 国家を治めととのえること。

裨益 〓 利益となること。助けとなること。

尠少 〓 非常に少ない。

蓋し 〓 確かに。おそらく。たぶん。

【参考サイトおよび文献】

・みやぎの101人（島津啓次郎）

・『小説島津啓次郎』（榎本朗喬著、二〇〇

三年一月、鉾脈社発行）